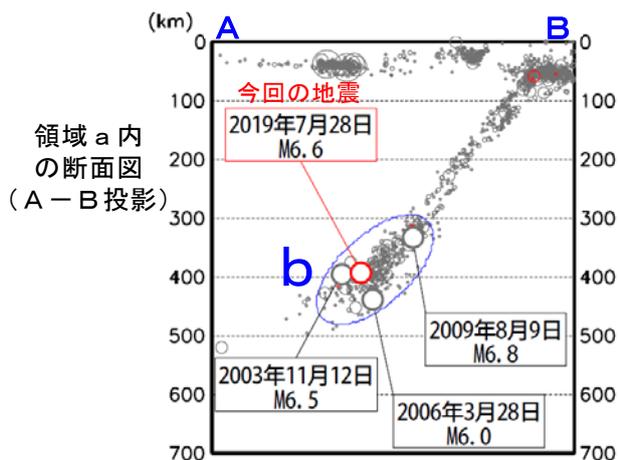
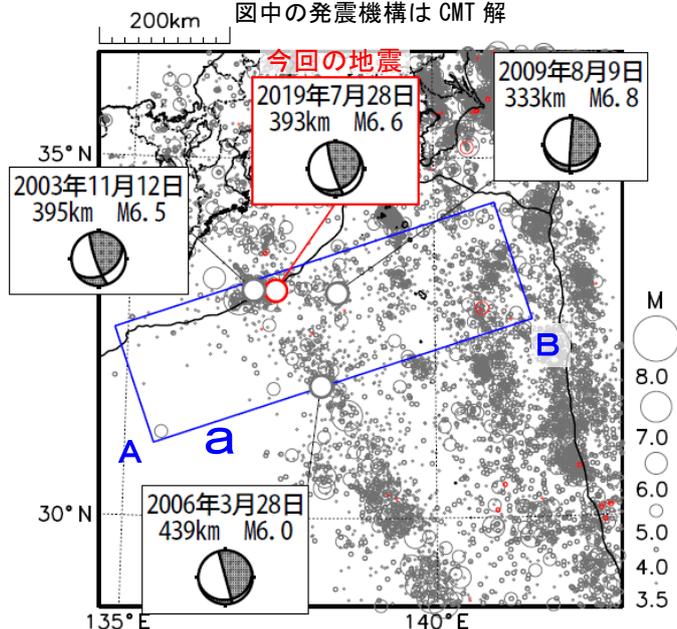
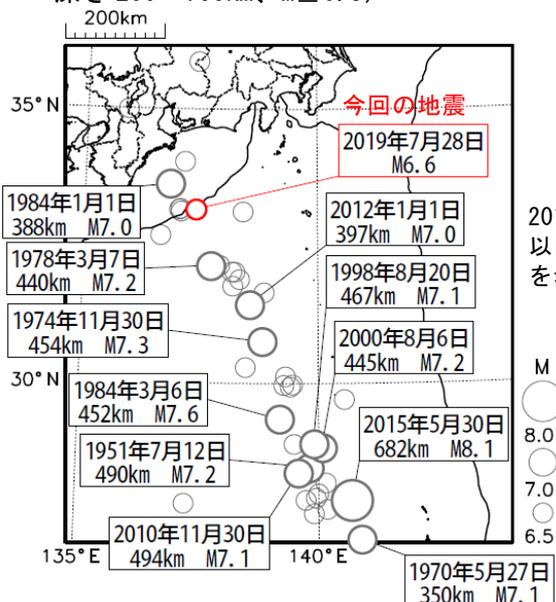


7月28日 三重県南東沖の地震

震央分布図
 (1997年10月1日～2019年7月31日、
 深さ0～700km、 $M \geq 3.5$)
 2019年7月以降の地震を赤く表示
 図中の発震機構はCMT解



震央分布図
 (1922年1月1日～2019年7月31日、
 深さ200～700km、 $M \geq 6.5$)



2019年7月
 以降の地震
 を赤く表示

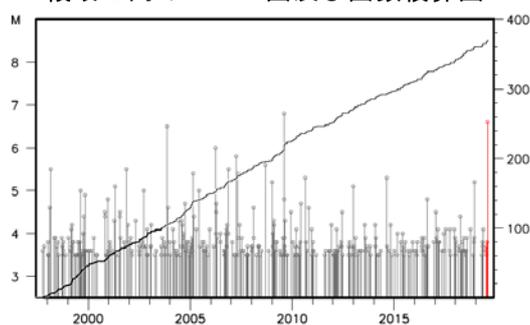
2019年7月28日03時31分に三重県南東沖の深さ393kmでM6.6の地震（最大震度4）が発生した。この地震により、宮城県で震度4を観測したほか、北海道から近畿地方にかけて震度3～1を観測した。この地震は太平洋プレート内部の深いところで発生した。発震機構（CMT解）は、太平洋プレートの沈み込む方向に圧力軸を持つ型である。

震央付近よりも、震央から離れた地域で大きな揺れを観測しており、この現象は「異常震域」と呼ばれている。

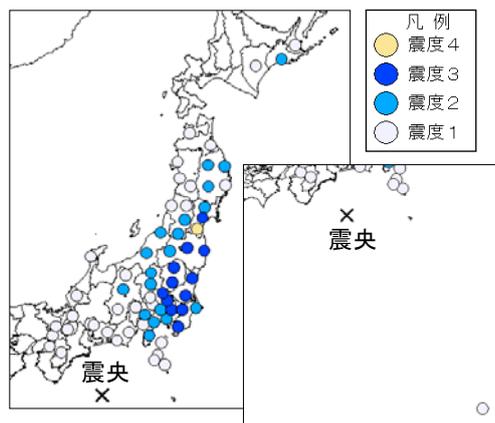
1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近（領域b）では、M5.0以上の地震が時々発生しており、2009年8月9日にM6.8の地震（最大震度4）が発生した。

1922年以降の活動をみると、今回の地震の震央付近から小笠原諸島西方沖にかけて、M7.0以上の深い地震が時々発生している。

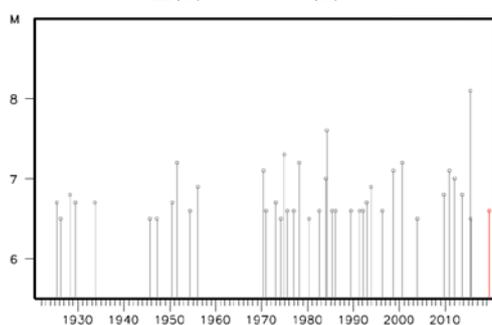
領域 b 内の M-T 図及び回数積算図



今回の地震
 の震度分布
 (地域震度
 で表示)



左図の M-T 図



【参考】震央付近の場所よりも震央から離れた場所で大きな震度を観測する地震について

震源が非常に深い場合、震源の真上ではほとんど揺れないのに、震源から遠くはなれた場所で揺れを感じる場合があります（次ページ参照）。この現象は、「異常震域」という名称で知られています。原因は、地球内部の岩盤の性質の違いによるものです。

プレートがぶつかり合うようなところでは、陸のプレートの地下深くまで海洋プレートが潜り込んで（沈み込んで）います。通常、地震波は震源から遠くなるほど減衰するものですが、この海洋プレートは地震波をあまり減衰せずに伝えやすい性質を持っています。このため、沈み込んだ海洋プレートのかなり深い場所で地震が発生すると（深発地震）、真上には地震波があまり伝わらないにもかかわらず、海洋プレートでは地震波はあまり減衰せずに遠くの場所まで伝わります（下図）。その結果、震源直上の地表での揺れ（震度）が小さくとも、震源から遠く離れた場所で震度が大きくなる場合があります。

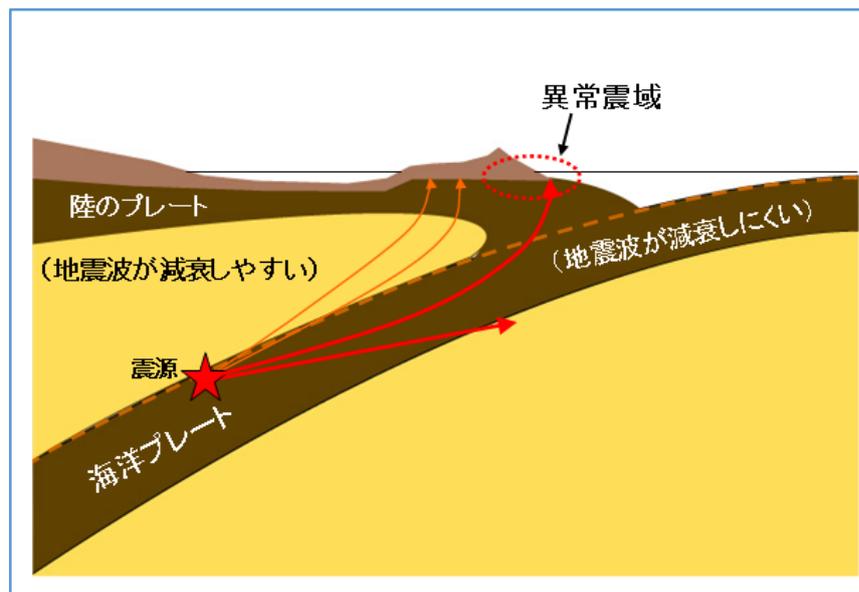
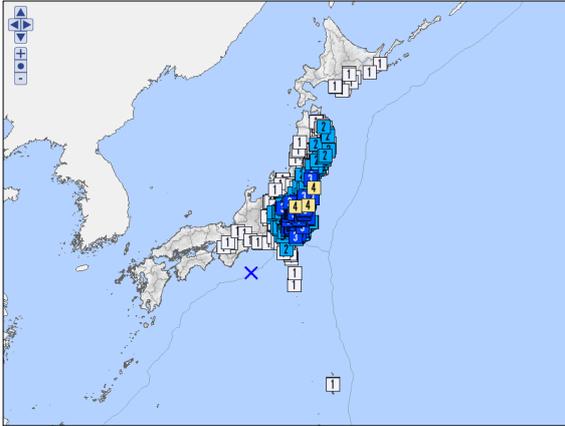
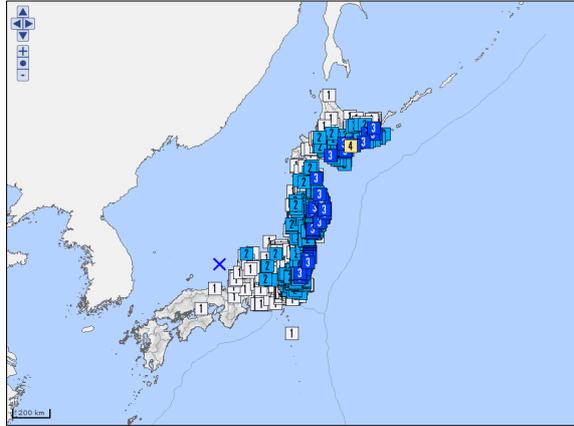


図 深発地震と異常震域

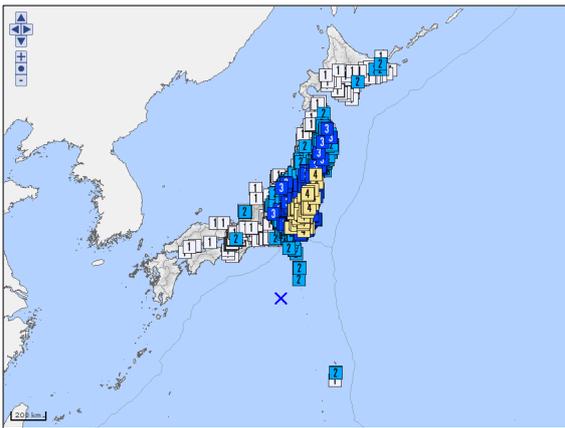
◇ 異常震域のあった過去の地震の震度分布図の例



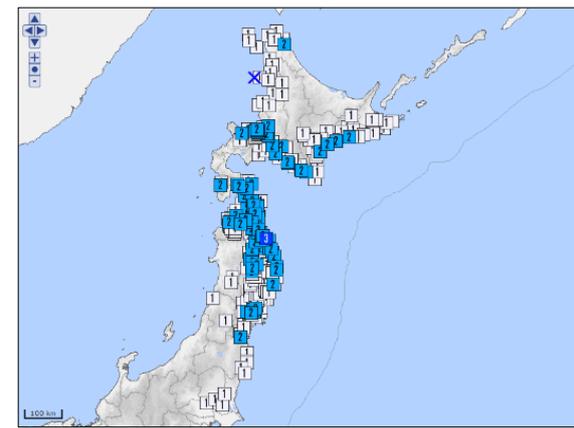
2003年11月12日の三重県南東沖の地震
(M6.5、震源の深さ396km)



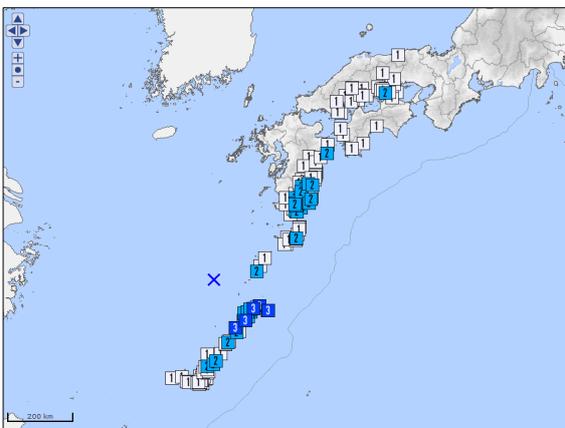
2007年7月16日の京都府沖の地震
(M6.7、震源の深さ374km)



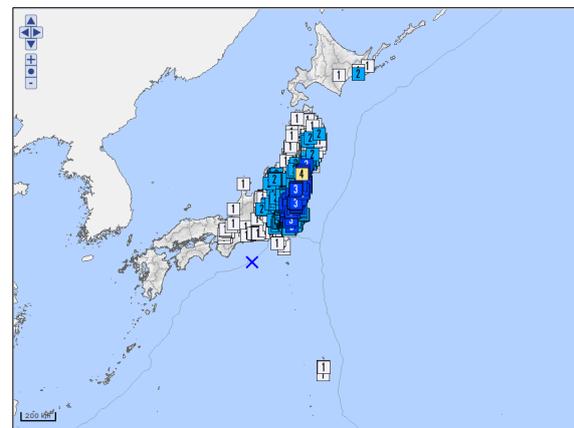
2012年1月1日の鳥島近海の地震
(M7.0、震源の深さ397km)



2016年1月12日の北海道北西沖の地震
(M6.2、震源の深さ265km)



2019年7月13日の奄美大島北西沖の地震
(M6.0、震源の深さ256km)



2019年7月28日の三重県南東沖の地震
(M6.6、震源の深さ393km)

※震度分布図は気象庁の震度データベース検索
(気象庁ホームページ：<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqdb/data/shindo/index.php>)にて検索したものを使用。

※震度分布図の地図に国土交通省国土数値情報のデータを使用している。